瀬戸地区・陶祖公園、馬ヶ城

瀬戸川上流右岸の小高い山の上には陶祖公園、川の南側には馬ヶ城の丘陵が広がっています。陶祖公園は陶祖藤四郎を顕彰した六角陶碑を中心に、明治時代に公園化された場所です。浄水場のある馬ヶ城には中世の窯跡が多く分布しています。

六角陶碑（市指定文化財 / 工芸品）

碑文が彫られた碑棹の高さが 3.3 m 、台座を含めると 4.1 m にもなる世界最大級の陶製碑です。瀬戸陶業の祖として数々の伝説が残される「加藤四郎左衛門景正（通称：藤四郎）」の業績を称えるため、慶応 2 年（1866）に、当時瀬戸窯取締役であった加藤清助（景登）が尾張藩に建碑を願い出て、大物づくりの名人であった加藤岸太郎が製作にあたり、慶応 3 年（1867）6 月に瀬戸川の北側に位置する北新谷の丸窯で焼成されました。六面にわたって刻まれた碑文は、当時尾張藩士で漢学者・儒学者であった阿部伯孝が自筆で撰文したもので、その文字は名古屋宮町の篆刻家、秋田新蔵により彫られました。

志野焼燈籠（一対）（市指定文化財 / 工芸品）

慶応 3 年（1867）に六角陶碑が建設された際、献灯用の陶製燈籠建設の議がもちあがりました。しかし、この時は政治的不安や不況などから実現しませんでした。その後再び建議され、当時の有力者 20 名の寄付により、加藤岸太郎が 1 年がかりで製作しました。この燈籠は、表面に志野釉を施した宝珠・笠・火袋・中台・竿・基礎の六部分からなり、高さ 285 ㎝と国内の陶製燈籠としては最大級を誇ります。台座には「明治五年　壬申三月」の銘があり窯垣で築かれた四方壇の上に据えられています。

竹露庵

この茶室は明治 19 年（1886）に、当時瀬戸で唯一の蘭方医であった加藤道三の息子が、名古屋の幅下（西区）あたりにあった某家邸内の茶席をもらい、加藤景登親子に相談して今の場所に移築しました。そのいきさつについての詳細は不明ですが、同年には有栖川宮様をお迎えしており、その際、竹露庵と名づけられました。

景登翁之碑

六角陶碑建造において多大な功績を残した加藤景登を称える陶碑の建設が、明治 20 年（1887）頃に発案され、28 名からなる有志が資金を集め、製作を寺内信一（半月）に依頼しました。陶碑の焼成は 2 代加藤繁十（しげじゅう）が務め、明治 24 年（1891）に完成しましたが、同年に起きた濃尾地震で倒壊してしまいます。現在の姿は、昭和 14 年（1939）にセメントなどでつなぎ合わせ、修復されたものです。

夕日窯跡

陶祖公園内には、戦国時代から江戸時代にかけて操業した窯跡が 5 基確認されています。竹露庵の西側には夕日窯跡の調査によって出土した資料を展示しています。遺物は窯道具の匣鉢が大半を占め、この他、天目茶碗や皿類などが少量みられます。窯道具が多いことから、この周辺が作業場近くであったことが想定されていますが、窯本体は展示施設から北西の少し離れた場所でその一部が確認されています。遺物の時期は 15 世紀末 ～ 16 世紀前葉に比定されるため、地上式の大窯構造の窯体であったと思われます。

ホフマンの森

明治時代初め頃の瀬戸は、窯業燃料となる薪材の伐採により、周辺の丘陵地はほとんどが禿山の状態でした。明治 38 年（1905）、この禿山を復旧するために東京帝国大学農科大学の外国人教師、アメリゴ・ホフマンが招聘され、彼の指導のもと近代的砂防工事が実施されました。その跡が現在「ホフマンの森」として残されています。日本で初めて欧州式の工法が導入され、その後の治山技術に大きな影響を与えました。現在、最初の工事で建設されたものとしては、地表に一部露出した 5 号堰堤の上部と明治 42 年（1909）に設置された鉄線蛇篭が数か所確認できます。これらは近代の砂防工事の様子を物語る貴重な遺産となっています。

馬ヶ城浄水場

馬ヶ城浄水場は、昭和 6 年（1931）に起工し、同 8 年（1933）12 月 16 日に給水を開始しました。貯水池は、全高 16.6 m - 全長 54.45 m の堰堤で貯水し、堰堤は割石混凝土（コンクリート）造りの重力式です。堰堤の中央部には溢流堰（いつりゅうせき）があり、ここから流れ落ちる水はレース状の鱗文様を描きます。ろ過池では薬品を使わず 1 日 4 ～ 5 m のゆっくりとした速度で水をろ過する「緩速ろ過」という方法で水をきれいにしています。浄水場の管理棟は、梁間 4 間 × 桁行 7 間の洋館意匠の建造物が建てられています。昭和初期の建築の要素が垣間みられ、瀟洒なドイツ風洋館の意匠でまとめられた趣のある歴史的建造物です。

椿窯跡

馬ヶ城浄水場の東に広がる丘陵地には、中世の古瀬戸などを生産した窯跡が数多く残されています。その一つである椿窯跡は、標高約 190 m の東向き斜面と南向き斜面に構築された 3 基の窯体で構成され、採集された製品から 13 世紀後半と 15 世紀前半の 2 回に分かれて操業を行っていたことが明らかにされています。この窯は古くからその存在が知られ、また、名品を焼いていた窯としても著名な窯です。

大栃窯跡

椿窯跡と同じく、馬ヶ城浄水場のある丘陵地に残された窯跡です。椿窯跡から約 200 m 東、標高 190 m 前後の南向き斜面に 3 基の窯体が構築されていました。13 世紀後半と 14 世紀後半に操業されています。このように、馬ヶ城の丘陵地に存在する窯跡は 2 回に分かれて操業するケースが多くみられます。これは、当時の工人たちが窯の操業に必要な燃料（薪）を採り尽したため別の場所に移動し、樹木が再生した後、同じ場所に戻って窯業生産を行ったためともいわれています。

瀬戸地区・陶祖公園・馬ヶ城地図

❶六角陶碑（P53）
❷志野焼燈籠（P54）
❸竹露庵（P54）
❹景登翁之碑（P55）
❺夕日窯跡（P55）
❻ホフマンの森（P56）
❼馬ヶ城浄水場（P57）
❽椿窯跡（P58）
❾大栃窯跡（P58）